

「言う」の意味: グライスの説明と反グライスの説明

The Meaning of the Word “Say”: Gricean and Anti-Gricean Accounts

村 越 行 雄

要旨

「言う」という言葉は、日常的に頻繁に使用されており、簡単に定義できそうに思えるが、いざ定義しようとする、様々な問題が絡み合っていることが明らかになる。その絡み合っている諸問題をいかにして解決していくかによって、様々な定義が可能となるが、今回取り上げるものは、あくまでもその一つの可能性として、グライスの定義とその批判者の定義である。内容的に簡単に言えば、発話される言葉の言語的意味のみによっては、話し手が伝達しようと意図する意味が全て確定できない場合で、そのような「言う」の意味は、勿論全て言語的意味で処理することはできず、またグライスの言う「含意」として単純に処理するには無理があり、結局意味論的には処理できず、語用論的にしか処理できない意味をどのように解釈し、どのように説明していくかが問題となり、その点に関して、対立しあう主張を検討することによって、問題点を浮き彫りにし、「言う」の意味を明らかにすることが本稿の目的である。具体的に検討するものは、グライスの定義 (H.P.Griceの“Utterer’s Meaning and Intentions”(1969)と“Logic and Conversation”(1975))とその批判としてのR. Carstonの“Implicature, Explicature, and Truth-Theoretic Semantics”(1988)、F. Récanatiの“The Pragmatics of What Is Said”(1989)、K. Bachの“Semantic Slack”(1994)である。そして、検討の順序は、「1. はじめに」、「2. 「言う」の意味に関するグライスの説明」、「3. 語用論的に確定される要素」、「4. 「言われること」と拡充」、「5. 語用論的処理の二側面と二つのタイプの拡充」、「6. Carston、Récanati、そしてBachの主張と問題点」、「7. 最後に」となる。

Key words: say (言う)、meaning (意味)、implicature (含意)、enrichment (拡充)、Grice (グライス)、Carston (カーストン)、Récanati (レカナティ)、Bach (バック)

1. はじめに

言語手段によって伝達する際、話し手が聞き手に伝達する内容を全て言語化し、発話される言葉の字義どおりの意味が伝達内容全てであるというケースだけでなく、そのような言語的意味以上のこと（または、以外のこと）を伝達するケースもある。そして、日常的な会話では（勿論、それ以外の様々な談話でも同様であるが）、後者の方が一般的に見られるケースであり、その理由の一部として、効率と効果などが挙げられる（伝達内容を全て言語化することが、果たして効率と効果の面で適していると言えるだろうか）。後者の場合、話し手が伝達しようと意図する意味は、発話される言葉の言語的意味のみを対象にして、全て意味論的に処理できるのとは異なり、その発話が行われるコンテクストに依存し、そこから得られる諸情報を利用して推論するもので、語用論的に処理するものである。そこで、今回は、意味の内、語用論的に確定できる側面に焦点を合わせ、「言う」という言葉の定義との関係で検討することにする。なお、具体的には、R.Carstonの“*Implicature, Explicature, and Truth-Theoretic Semantics*”(1988)^①、F.Récanatiの“*The Pragmatics of What Is Said*”(1989)^②、K.Bachの“*Semantic Slack*”(1994)^③の三論文を検討することにする。

2. 「言う」の意味に関するグライスの説明

H.P.Griceの含意理論が出現して以来、Griceによる「言われること」(what is said)と「含意されること」(what is implicated)の区別が一般的になっている。ごく単純に考えれば、「言われること」とは、話し手によって実際に口に出して言われることであるから、話し手が実際に口から発する言葉（例えば、文）の意味となり（what is said = sentence meaning）、意味論の領域に属するものとなり、それに対して、「含意されること」とは、文の意味以上のことで、従ってコンテクスト依存的で、推論によって得られる意味であるから、語用論の領域に属するものとなるであろう。事実、「言われること」と「含意されること」の区別を意味論と語用論の区別として捉える傾向は見られる。例えば、Carstonによれば、Griceの原則を取り上げ、それについて論じたGazdar、Horn、Levinsonなどの言語学者は、あたかも言語解釈によって引き出されない意味が全て含意であるかのように決め付けてきたし

④、Bachによれば、含意を導き出す際に関係する推論過程と本質的には同種の推論過程が、「言われること」を確定する際にも入り込むことを Grice が完全に見落としたと多くの哲学者が議論してきた^④。しかし、意味論と語用論の区別によって簡単に説明できないことは、Carston、Bach、更に Récanati^⑤が指摘するまでもなく、明らかである。というのは、Grice自身が、一方では、the particular meanings of the elements of S(sentence), their order, and their syntactical character (「文の諸要素の特定の意味、それらの配置、そしてそれらの統語的特徴」)^⑥によって「言われること」が確定されるとし、それとは別に、I intend what someone has said to be closely related to the conventional meaning of the words (the sentence) he has uttered (「私は、ある人が言ったことを、その人が発話した言葉(文)の言語慣習の意味に密接に関係するものであるとするつもりである」)とし、その中で指示物の付与、発話の時、曖昧性の除去を挙げている^⑦からである。そのことは、「言われること」が言葉の言語的意味(意味論的に処理できるもの)だけでなく、指示物の付与(発話の時を含む)と曖昧性の除去(コンテクスト依存的で、語用論的に処理すべきもの)によって確定されることを示している。まさにその意味で、Bachは、「言われること」を確定する際の語用論的処理の役割を Grice が認識していたと言い、Récanatiは、「言われること」がコンテクスト依存的であることに Grice が気が付いていたからこそ、注意深く、「言葉の言語慣習の意味に密接に関係するもの」という表現を使用したのであり、言葉の言語慣習の意味が「言われること」を確定するか、または確定の助けになるが、前者が後者と同一にはなりえないことを示していると言うのである。しかし、また一方では、Griceにとっては、分析の中心が「含意されること」にあって、「言われること」にはなかったという Carston の批判^⑧、言葉の言語慣習の意味と「言われること」の間の隔たりが、以前認識されていたよりも大きいことが最近の研究によって示され、結局「言われること」に関して、かなりの部分が語用論的に確定されることが明らかになったという Récanati の批判^⑨(Grice の指摘した指示物の付与と曖昧性の除去以外にもある)などは、納得できるものである。

「言われること」を言葉の言語的意味として (what is said = sentence meaning) ではなく、「言葉の言語慣習の意味に密接に関係する

もの」として (what is said \geq sentence meaning) 捉えることは、言葉の言語的意味から離れることは出来ず、あくまでもそれと直接関係するものでなければならないが、それと直接関係するものである限り、言語的意味によっては確定できないが、コンテキスト依存的で、語用論的に確定できるような要素も含まれることを示していると言え、結局、「言われること」は、言語的意味+指示物の付与・曖昧性の除去から成ることを表すことになる。例えば、I met him near the bank yesterdayと言う場合、話し手によって言われることは、ただ単にその文の言語的意味だけからでは確定されず、“I”と“him”の指示物、“yesterday”の月日、そして“bank”が「銀行」なのか、それとも「川岸」なのかという曖昧性を明らかにする必要がある、そのことによって初めて確定されるのである（言語的意味からでは、「発話する本人」、「男性」、「発話日の前日」、「銀行、または川岸」までしか明らかにされず、具体的に誰なのか、いつなのか、銀行と川岸のいずれなのか確定されない）。しかし、Griceにとっては、指示物の付与と曖昧性の除去が語用論的に確定されるものでありながら、「言われること」の中に含まれることになるが、それ以外の語用論的に確定されるものは、純粋な含意として「含意されるもの」の中に入れられるのであり、何を基準にしてその線引を行っているのであろうか。Bachが指摘するように⁽¹¹⁾、J.L.Austinの発語行為の中の意味行為の定義（ある一定の音語をある程度明確な意味(sense)と指示を伴って使用する行為）と類似しており、そこにある種の共通性があるのかもしれないが、あくまでも言葉の言語的意味が基本で、必要がある限り、その言語的意味を明確にする為に（言語的意味の枠を超えることになるが）必要とされる最小限度のものとして指示物の付与と曖昧性の除去を「言われること」の中に入れざるをえず、その意味で、「言葉の言語慣習の意味に密接に關係するもの」という表現をしたのであろうが、語用論的に確定されるものを正確にどのように位置付けるかは、明らかにされないままに残されている。

3. 語用論的に確定される要素

Griceにとっては、「言われること」と「含意されること」を区別する基準、含意かどうかを決める基準は、「言葉の言語慣習の意味に密接に關係するもの」であり、従って言語的意味に密接に關係しなければ、

含意とされ、「含意されること」の中に入れられることになる。そこで、語用論的に確定されるものは、指示物の付与と曖昧性の除去を除いて、全て含意としていいのであろうか。最近、Griceが含意としたものの多くは、実は含意ではないという批判が出されている。前掲の三論文が、その例である。

Carstonの例を見ることにする。

例1 A: How is Jane feeling after her first year at university?

(「Janeは、大学で1学年を終えて、どう思っていますか。」)

B: She didn't get enough units and can't continue.

(「彼女は、十分な単位を得なかった、そして、続けることが出来ない。」)

Bの発話に対するAの解釈：Jane didn't pass enough university course units to qualify for admission to second year study, and, as a result, Jane cannot continue with university study. Jane is not feeling at all happy about this. (「Janeは、2学年へ進級する資格を得るのに必要なだけの大学履修科目の単位をパスしなかった。そして、その結果、Janeは、大学での勉強を続けていくことが出来ない。Janeは、このことについて全く嬉しく思っていない。」)⁽¹²⁾

Bの発話とそれに対するAの解釈を比較すれば明らかなように、Bが発話した文の言語的意味以上のものが、Aの解釈の中に入り込んでおり(下線部の部分)、それが語用論的に確定されるものである。その中で、Griceに従えば、“she”の指示物の付与(→ Jane)と“get”と“units”の曖昧性の除去(→ passと university course units)は、「言われること」(Carstonは、Griceの what is saidではなく、explicature (表意)を使用する)の一部となり、“Jane is not feeling at all happy about this”は、含意で、「含意されること」になるが(Carstonは、implication (含意)と implicature (推意)を区別して使用するが、本稿では、その問題は取り上げずに、「含意」を使用する)、“to qualify for admission to second year study”と“with university study”は、「言われること」の一部なのか、それとも「含意されること」の一部なのか、いずれであらうか。Griceに従えば、文の言語的意味に密接に関係していないという理由で、含意とされ、「含意されること」の一部にされる。しかし、Carstonにとっては、Bの文の接続詞“and”の前後にある二つ

の節を拡充し、完全なものにさせ、“as a result”によってその二つの節がつなげられており、それらは文の言語的意味の一部ではないが、だからといって含意とされるべきものではないのである。むしろ、重要なのは、言語的意味の拡充(enrichment)で、発話の表意が言語的意味、指示物の付与、曖昧性の除去、拡充から成るということであり、拡充を表意の一部に入れる為には、前述のGriceの基準とは異なる、表意と含意を区別する為の新たな基準が必要になり、それが機能的独立の基準であるとしている。

拡充に関してCarstonが挙げる例には、具体的な名称を付けていないが、二つのタイプの拡充の例が含まれており⁽¹³⁾、それらをRécanatiが飽和(saturation)と強化(strengthening)(D.Sperber and D.Wilsonの例も対象にしている)と名付け⁽¹⁴⁾、それらRécanatiの名称に代わるものとして、Bachが完全(completion)と拡大(expansion)と名付ける⁽¹⁵⁾。名称の問題は別にして、二つのタイプの拡充を「言われること」の中に入れる程、言語的意味に密接に関係しているとは言えず、従って含意とせざるをえないGriceを、Sperber and Wilson、Carston、Récanati、そしてBachが一致して批判するが、拡充の位置付け、「言われること」と「含意されること」の区別の基準などが異なる。

4. 「言われること」と拡充

発話される文の言語的意味を拡充することで、話し手によって「言われること」が明らかになるとした場合、「言われること」という表現をどのように捉えればいいのか。直観的に言えば、話し手が「言う」ということは、口から言葉を発することであり、話し手によって「言われること」とは、口から発せられる言葉のことであり、その言葉の言語的意味のことであろう。それがごく自然な考え方であろう。そして、それがGriceの考え方でもあるし、Récanatiもその点で同意すると言える⁽¹⁶⁾。つまり、「言われること」が、発話される言葉の言語的意味に密接に関係するものであるべきである。そこで、もしそうであれば、拡充をGriceの言う「言われること」の一部とする場合、それはGriceの「言われること」の枠を超えてしまうことになる。まさにそうしたのがRécanatiである。それを避ける為に、「言われること」と「含意されること」の中間的領域を作り(Bachは陰意(implicature)と呼

ぶ)、前者の枠を超えるが、後者の枠内には入らないものとして拡充を位置付けたのがBachである。そして、「言われること」を表意(=発話の明示的内容)と言い換えて、表意の一部として拡充を入れたのがCarstonである。結局、Griceの言う「言われること」(言語的意味が中心で、必要な限り、指示物の付与と曖昧性の除去といった調整が加えられることになるが、Grice批判の中には、「言われること」=言語的意味として捉える者もいる)には含まれない拡充を、Griceは含意とし、Carstonは表意とし、Récanatiは「言われること」に含まれるとし(Griceの定義する「言われること」とは異なり、それを拡大する)、Bachは陰意としているのである。それは、語用論的に確定される指示物の付与・曖昧性の除去、拡充、含意のそれぞれの位置付けの相違に関わるものである。

Carstonの表意は、Sperber and Wilsonの定義に基づくものである。*Explicitness*: An assumption communicated by an utterance U is *explicit* (that is, is an explicature) if and only if it is a development of a logical form encoded by U. (「明示性: 発話Uによって伝達される想定は、それがUによってコード化される論理形式の発展であるとき、かつその場合のみ明示的である(すなわち、表意である)。」)とし、明示的に伝達される想定が表意、そして非明示的に伝達される想定が含意(implication(含意)とimplicature(推意)を区別し、ここでは「推意」を指しているが、前述したように、その問題は取り上げずに、「含意」を使用する)であるとSperber and Wilsonは言う⁽¹⁷⁾。そして、発話される言語表現の論理形式とは、文法によって付与される意味のことであり、自動的な解読過程によって発話解釈の時に回復される意味のことである。簡単に言えば、言語的意味を発展させ、その延長線上にある限り、表意ということになる。そして、表意=発話の明示的内容=「言われること」とCarstonは言う(表意とは、明示的に伝えられるもので、話し手が聞き手に明らかにしたいと思っているものであるとしている)⁽¹⁸⁾。Carstonの表意が「言われること」であっても、Griceの「言われること」よりもその枠が拡大されており、それはRécanatiの「言われること」と同一で、指示物の付与・曖昧性の除去のみならず、拡充も含まれるのである。ところが、拡充によって生み出される表意の内容が明示的に伝達されることはなく、その理由としては、伝達さ

れることの一部が言葉で言い表されないことが挙げられるとし、多分そのことに気が付いた Récanati が用語「表意」の使用を避け、結果的に、「言われること」という表現を使用したと Bach は言うのである⁽¹⁹⁾。Récanati の真意は別にして、「明示的に伝達される」(explicitly communicated) という表現に対する解釈に相違が見られ、Carston にとっての「明示的」(explicit) とは、言葉の言語的意味だけでなく、その発展までも含むことができるが、Bach にとっては、言葉で言い表されることなのである。そして、Bach にとっての拡充とは、「言われること」の中で、言葉で言い表されない部分のことであり、従って「明示的」ではなく(言葉によって表面に表れる意味ではなく)、「暗に示される」(implicit) もの(言葉の陰に隠されている意味)で、その意味で、「陰意」と呼ばれ、しかも「言われること」(Grice の「言われること」と同様、言葉の言語的意味に密接に関係するもの)から切り離されるのである。つまり、陰意は、「言われること」の枠を超えるが、「言われること」の外にあって、それに追加される含意とは異なり、「言われること」から導き出されるものである。結果として、Carston の表意と含意の区別に対して、Bach の Grice 的「言われること」、陰意、そして含意の区別という対照が生まれてくることになる。

指示物の付与・曖昧性の除去と拡充の区別は、何を基準にして行われるのであろうか。例えば、Récanati によれば、飽和は指示物の付与と本質的には違いなく、後者は前者の特殊なケースということになり⁽²⁰⁾、Bach にしても、完全に関する例の中に、多くの指示関係の例が含まれているという具合に、指示物の付与・曖昧性の除去と拡充を区別する為の明確な基準を見つけ出すことが、いかに難しいかを示すのではないであろうか。その判断は別にして、Bach のように、Grice 的「言われること」に言語的意味・指示物の付与・曖昧性の除去を、陰意に拡充を含めるよりも、Carston と Récanati のように、表意または非 Grice 的「言われること」にそれら全てを含める方が、少なくとも一本化されて、理解しやすいであろう。というのは、言語的意味だけでは表意または非 Grice 的「言われること」が十分確定できず、その間に語用論的に確定される要素が入り込み、それが具体的には指示物の付与、曖昧性の除去、そして拡充であるということが重要で、そのような関係は、陰意という中間的領域を新たに作り出すよりは、一本化された形の方がより

鮮明になると言えるからである。勿論、「言葉の言語慣習の意味に密接に関係するもの」という、「言う」の意味に関する Grice の直観的理解、そして Austin の発語行為の中の意味行為の定義に対する Bach の賛同は理解できるが。

5. 語用論的処理の二側面と二つのタイプの拡充

意味に関連して、意味論的に処理できる言語的意味、そして語用論的に処理すべき指示物の付与、曖昧性の除去、拡充、含意があり、後者に関しては、最初の二つを「言われること」に含め（+言語的意味）、最後の二つを含意として区別する Grice、最初の三つを表意として（+言語的意味）、含意から区別する Carston⁽²¹⁾、最初の三つを「言われること」の語用論的構成要素として（+言語的意味）、含意から区別する Récanati⁽²²⁾、最初の二つを「言われること」に含め（+言語的意味）、三番目を陰意とし、更にそれらから含意を区別する Bach という具合に、区分けの相違が見られるが、内容的に言えば、最初の三つと最後をそれぞれ二つの異なる範疇に入れて、区別できる。そこで、そのような語用論的処理の二側面の区別の仕方、そして拡充の中での区別の仕方が重要となる。

Carston によれば、語用論的に確定される要素に関して、表意と含意を区別する為には、機能的独立の基準(a criterion of functional independence)が必要となる。その基準とは、含意は表意と異なり、内容的に重複することはなく、前者は後者から独立して機能するということで、従って、もし含意（含意と考えられるもの）が表意を必然的に伴うのであれば、独立して機能することが出来ず、含意と考えられるものが実際は表意（表意の一部）ということになり、もし必然的に伴わないのであれば、純粋な含意ということになる⁽²³⁾。その一例として、前掲の例 1 を使用する。

例 1 a: She didn't get enough units and can't continue.

例 1 b: Jane is not feeling at all happy about this.

例 1 b は、例 1 a の発話に対する解釈である。例 1 b は、例 1 a によって言語的に与えられるものではないので（例 1 a の発話では、そのようなことは言葉で言い表されない）、含意であるとまず考えるが、例 1 a によって表現される命題（表意、つまり言語的意味を発展させ、そ

の延長線上にあるもの)を必然的に伴わないので、例1 aの純粋な含意ということになる。

そして、拡充を二つのタイプに区別し⁽²⁴⁾、最初のタイプは、言語的意味、指示物の付与、そして曖昧性の除去によって、完全な命題(a complete proposition)が与えられるが、その命題は表意として受け取るには、まだ十分に特定化されていない場合であり、第二のタイプは、言語表現の論理形式が命題として完全でなく、それを完全なものにし、話し手が伝えようとしている完全な命題を回復する必要がある場合である。最初のタイプの例としては、

例2: The park is some distance from where I live.

(「その公園は、私の住んでいるところから距離があります。」)

例3: It will take us some time to get there.

(「そこに行くには、時間がかかります。」)

例4: Mrs. Smith has three children.

(「Smith夫人には、三人の子供がいます。」)

などが挙げられており、第二のタイプの例としては、例1(特に、“Jane didn’t pass enough university course units to qualify for admission to second year study”と“Jane cannot continue with university study”に関する部分)などが挙げられている。そして、機能的独立の基準に関しては、次のようになる。その一例として例4を取り上げると、例4によって話し手が聞き手に明らかにしようとしていることは、“Mrs. Smith has exactly three children”(「Smith夫人には、丁度三人の子供がいます」)であるが、その発話によって表現される命題は、“Mrs. Smith has at least three children”(「Smith夫人には、少なくとも三人の子供がいます」)である。もし前者を含意と考えられるものであるとしても、前者は後者(表意)を必然的に伴うので、実際には表意の一部(例4の言語的意味を発展させ、その延長線上にある)ということになる。

Carstonは、拡充の二つのタイプに具体的な名称を付けていないが、Récanatiによって、第一のタイプが強化、第二のタイプが飽和と名付けられるのである。そして、含意と「言われること」の中の語用論的に確定される要素を区別する為の基準になりうるものを四つ挙げ、例えば、最小限要求主義者の原則(the Minimalist Principle)、入手可能性の原

則(the Availability Principle)、独立の原則(the Independence Principle)、そして範囲の原則(the Scope Principle)を挙げ、Sperber and Wilson、特にCarston (Sperber and Wilsonの流れを汲むので、彼らの理論的枠組みの中で扱っている)が第一の原則を否定するが、含意と「言われること」の語用論的側面を区別する為の基準としては機能しないが、文の意味分析を確定する基準としては評価できるとし、Carstonの主張する第三の原則を否定し、第二と第四の原則の有効性をRécanatiは強調するのである。

Récanatiによると⁽²⁵⁾、最小限要求主義者の原則とは、意味の内、語用論的に確定される側面は、発話が完全な命題を表現する為に、語用論的に確定されることが必要なとき、そしてその場合のみ「言われること」の一部になるということである。そのことは、意味の内、語用論的に確定される全ての側面に対して(「言われること」の一部である限り)、発話が完全な命題を表現する為に、真偽の評価をする為に埋めなければならない文の意味における隙間が対応することを意味する。例えば、指標詞(人称代名詞など)のように、コンテキストに敏感に影響を受ける表現が、文の意味の中に隙間を作り出すことになり、その指示物を付与することで、隙間が埋められることになる。そして、最小限要求主義者の原則のところ、拡充の二つのタイプの区別が扱われる。Sperber and Wilsonの理論的枠組みの中では、語用論的に確定される側面として、指示物の付与、曖昧性の除去、そして拡充の三つが関わりを持ち、拡充には飽和と強化の二つのタイプが見られるとしている。

例5: He has bought John's book.

(「彼は、Johnの本を買った。」)

例6: I have had breakfast. (「私は、朝食を食べた。」)

Récanatiは、飽和の例として例5を挙げ、強化の例として例3と例6を挙げる。飽和では、文の意味は、発話が完全な命題を表現する為にコンテキストによって埋められなければならない隙間を生み出す。例5におけるJohnと本の間を確定する必要がある、それが隙間であり、言い換えれば、“He has bought the book that bears relation x to John” (「彼は、Johnと x 関係にある本を買った」)の中の変数 x が隙間と言える。その関係は、例えば、「Johnが書いた本」なのか、「Johnが探していた本」なのか、語用論的に確定しなければならない隙間で、コ

ンテキストによって埋められるものである。つまり、文の意味の中へきた隙間を埋めることが、飽和ということになる。更に、飽和は、指示物の付与と本質的に異なるものではなく、後者が前者の特殊なケースであるという関係にある。というのは、指示表現は、発話が完全な命題を表現する為にコンテキストによって埋められなければならない隙間を生み出すからである。従って、例5では、“he”と“John’s book”が文の意味における隙間であり、コンテキストによって埋められることで（前者が指示物の付与で、後者が拡充（飽和）となる）、例5の発話が完全な命題を表現することになる。そのことは、文の意味（例5の発話される文自体の言語的意味）が「言われること」（例5の発話によって「言われること」）を意味的に十分確定できないことを示すのである。

それに対して、強化とは、飽和のように、発話が完全な命題を表現する為に必要な拡充ではなく、発話によって話し手が意味することと一致させる為に必要な拡充のことで、完全な命題を入れて、より豊かな命題を取り出すといった拡充のことであり、より豊かな命題が完全な命題を必然的に伴うという関係にある。例6において、話し手(“I”)と発話の時が確定されれば、例6の発話が完全な命題を表現する為に埋めなければならない隙間はもはやなく、すでにそれ自体で完全な命題を表現していることになるが、例6の発話によって実際に表現される命題（話し手によって「言われること」、例6を発話する時、話し手が何を言おうと意味しているかということ）とは一致しない。そこで、後者を得る為には、前者の「文によって表現しうる最小限の命題」(the minimal proposition expressible by the sentence)(例3、例6などのように、指示物の付与（発話時の確定を含む）と曖昧性の除去がなされれば、それ自体で完全な命題を表現していると言えるとし、そのような完全な命題を「文によって表現しうる最小限の命題」とRécanatiは呼ぶ)を超えて、語用論的に特定化することによってその最小限の命題を拡充する必要がある。そのような語用論的特定化は、「言われること」の一部であるが、文自体が明確な命題を表現する必要はないのである。具体的に言えば、例6が表現する完全な命題（最小限の命題）は、発話時に前に、話し手が少なくとも一度は朝食を食べたということで、例えば、20年前に、話し手が朝食を食べたことがあり、それ以降一度も朝食を食べたことがなくても、その命題は真となってしまう。それは、例6に

よって話し手が言おうとしていることではなく、それをコンテキストによって拡充して得られる“I have had breakfast today.”(「私は、今日朝食を食べた。’)こそが(発話時の確定は、例えば、1996年9月2日に発話されたことを確定することであるが、拡充の場合の「今日」は、「私は、朝食を食べた。’)の発話によって、話し手が「私は、今日朝食を食べた。’)を意味していることを明らかにする為に、拡充によって特定化された、より豊かになった内容のことであり、両者は異なる)、話し手の言おうとしていることである。しかも、その拡充は、「私は、今日朝食を食べた。’)が「私は、発話時以前に、少なくとも一度は朝食を食べた。’)を必然的に伴うので、強化ということになる。

Récanatiは、強化を取り上げて、Sperber and WilsonとCarstonが最小限要求主義者の原則を否定したと言う。というのは、強化においては、発話によってすでに完全な命題が表現されており(指示物の付与と曖昧性の除去を前提にしている)、それがより豊かな命題に拡充される訳で、しかも後者が前者を必然的に伴う関係にあるが、最小限要求主義者の原則では、あくまでも発話によっては完全な命題が表現されておらず、拡充によって完全な命題が表現されることになるのであり、それは飽和を示しているからである。しかし、最小限要求主義者の原則に対する反対例(例3、例6などのような強化の例)は、飽和によっても処理可能であり、またそのような反対例の中には、強化に基づく説明よりも、飽和に基づく説明の方が現実的に好ましいケースも多くあるとRécanatiは反論する。例えば、例3によって「言われること」が、“It will take us a long time to get there.”(「そこに行くには、長い時間がかかります。’)であり、例6によって「言われること」が、“I have had breakfast on the day of utterance.”(「私は、発話のその日に、朝食を食べた。’)であるとしても、完全な命題に追加されるというのではなく、下線部を発話が完全な命題を表現する為に埋めなければならない隙間と考え、語用論的特定化がその隙間を埋めることであるとすることも可能であるとしている。更に、次のような例があるとしている。

例7: One boy came. (「一人の少年が来た。’)

例8: Every boy came. (「全ての少年が来た。’)

例7によって表現される最小限の命題は、“At least one boy came.”(「少なくとも一人の少年が来た。’)であり、そのより豊かな命題は、

“At least one of the boys in the class came.”（「クラスの少年達の内、少なくとも一人が来た。」）であり、後者が前者を必然的に伴うので（もしクラスの少年達の一人が来たのであれば、一人の少年が来たことになるから）、強化によって説明できる。しかし、例8の場合、最小限の命題は、“Every boy in the world came.”（「世界中の全ての少年が来た。」）であり、話し手によって「言われること」は、“Every boy in the class came.”（「クラスの全ての少年が来た。」）であるが、後者が前者を必然的に伴わないので（たとえクラスの全ての少年が来たとしても、世界中の全ての少年が来たことにはならないから）、強化によっては説明できず、従って最小限要求主義者の原則の方がより興味をそそるように見えるとしている。

例9: I have not had breakfast.（「私は、朝食を食べなかった。」）

例6の場合、実際に表現される命題「私は、発話のその日に、朝食を食べた。」が、必然的に最小限の命題「私は、生涯の中で、少なくとも一度は朝食を食べた。」を伴うので、強化によって説明できる。しかし、例9の場合、実際に表現される命題「私は、発話のその日に、朝食を食べなかった。」が、必然的に最小限の命題「私は、生涯の中で、一度も朝食を食べたことはなかった。」を伴うことはないので、最小限要求主義者の原則による説明の方が、強化による説明よりも興味をそそられるとしている。

Récanatiの反論は、Sperber and WilsonとCarstonの批判に対するもので、最小限要求主義者の原則を簡単には否定できないことを示すものであるが、最小限要求主義者の原則が、含意と「言われること」の中の語用論的に確定される側面を区別する為の基準として有効に機能しないことを認める点では、彼らに同意するのであり、ただし文の意味分析の基準としては（文の意味の中に生まれる隙間とその隙間の埋め方）、有効性を主張するのである。そして、以上の反論は、当然Carstonの機能的独立の基準（独立の原則）の否定につながるものである。例えば、前述した例3、例6～例9では、全て完全な命題が表現されるのであるが、例3と例6は、強化によって説明される一方、飽和によっても処理可能であるし、例7と例8、また例6と例9は、それぞれ類似した文でありながら、強化によって説明できる場合と、できない場合があり、結局実際に表現される命題（話し手によって「言われること」、発話によ

って話し手が言おうと意味していること)が必然的に最小限の命題を伴うとは必ずしも言えないことになる。そのことは、機能的独立の基準(含意と考えられるものが表意を必然的に伴えば、実際は表意(表意の一部)となり、伴わなければ、純粋な含意となる)の否定につながる。というのは、もし必然的に伴わなければ、純粋な含意になってしまうが、それら全ては拡充であり、「言われること」の一部(表意の一部)であるからである。

含意と「言われること」の語用論的側面を区別する為の基準として、その有効性を強調する入手可能性の原則と範囲の原則(あくまでも前者が中心で、後者は前者と連結して活用される)の内、前者を見ることにする⁽²⁶⁾。発話によって「言われること」は、ごく普通の話し手と聞き手にとって入手可能なもので、ごく普通の人の日常的な直感(理論家の直感ではなく)で理解できるものであるという前提で、「言われること」に関して決定を下す時、理論以前の私達の直感をいつも維持するよう努力すべきであるというのが、入手可能性の原則である。例えば、例6に関しては、次のようになる。もし話し手の言うこと(「言われること」)が、「私は、生涯の中で、少なくとも一度は朝食を食べた。」で、その含意が「私は、発話のその日に、朝食を食べた。」であるのなら、話し手は自分の言うことがわからないことになる。というのは、話し手はそれが自分の言うことであるとは知らないし、もし教えられたら、非常に驚くことになるからである。従って、「言われること」が、「私は、生涯の中で、少なくとも一度は朝食を食べた。」ではないことは、直感によって話し手にはわかるのであり、それが「私は、発話のその日に、朝食を食べた。」であると話し手は信じるのである。つまり、入手可能性の原則によって、例6の含意分析が不可能であることが明らかになる。そして、例3も同様であるとし、更に幾つかの例も同様の方法で分析していく。

例10: Everybody went to Paris. (「全員がパリに行った。」)

例10によって話し手の意味することが、“Everybody in the world went to Paris”(「世界中の全員が、パリに行った。」)ではなく、“Everybody in some group went to Paris”(「あるグループの全員が、パリに行った。」)であることは、入手可能性の原則によって明らかである。つまり、話し手の言うことが、前者であるとするのは、直感に

反することで、話し手はそのようなことを認めないからである。

例11: John has three children.

(「Johnには、三人の子供がいます。」)

例11によって表現される命題（「言われること」、話し手が伝達すること）は、本来「Johnには、丁度三人の子供がいます。」であるのに、従来は「Johnには、少なくとも三人の子供がいます。」であるとされ、前者が含意であるとされてきた。しかし、話し手が後者を「言われること」とであると認めることはしないであろう。つまり、そのことは、入手可能性の原則によって明らかであり、またその原則によって、前者が「言われること」の一部であることも明らかである。

入手可能性の原則によれば、話し手によって「言われること」は、ごく普通の直感によって明らかにされることになる（例えば、話し手の直感によってチェックするとか、話し手は認めないだろうとか、その他類似した表現を Récanati は使用する）。また、別の箇所では、文の意味の方が、「言われること」よりも難解で、理論的であると言うのである。その意味で、入手可能性の原則のところでは、最小限要求主義者の原則のところでは扱われた複雑な関係（例えば、発話によって実際に表現される命題と文によって表現される最小限の命題の関係など）はなく、直感による「言われること」の解釈が行われるのである。

最後に、Bach の場合、「言われること」に関する Grice の直観的理解を基本的には受け入れ（根本的には、Austin の定義を受け入れる）、「言われること」を「言葉の言語慣習の意味に密接に関係するもの」として捉え（言語的意味 + 指示物の付与 + 曖昧性の除去）、そこから弾き出された拡充を「含意されること」の中に入れるのではなく、「言われること」と「含意されること」の間の中間的領域として陰意を新たに作り出し、その中に入れることになる。従って、拡充の扱いに関して、Sperber and Wilson、Carston、そして Récanati に対して、根拠もなく、発話の明示的内容（=表意）と「言われること」という概念を拡大したとして批判し、Grice に対しては、「含意されること」という概念を拡大したとして批判するのである（後者については、彼らと一致する）。ともかく、Bach の場合、語用論的に処理されるべき要素が、「言われること」、陰意、そして「含意されること」の三領域で扱われることになる。

Bach にとっての拡充は、拡大と完全とに区別される⁽²⁷⁾。拡大は、文の非字義性(sentence non-literality) (隠喩などとは異なり、文のある構成要素が字義どおりの意味で使用されないのではなく、全ての構成要素が字義どおりの意味で使用されていても、文全体が字義どおりの意味で使用されないこと) の場合に適用される拡充の一種であって、文の意味が確定するのは、字義どおりに表現される命題、つまり最小限の命題(Récanatiの「最小限の命題」で、文の意味に最も密接に関係する命題として定義する)で、文に適当な語句を挿入することによって、最小限の命題を肉付けし、拡大し、それが話し手の伝達しようとすることになる。完全は、意味の確定不十分性(semantic underdetermination)の場合に適用される拡充の一種であって、統語的には問題はないが、意味的に不完全な文が、完全で、明確な命題を表現する為に何らかの追加が必要になる場合で、文の意味が確定するのは、最小限の命題ですらなく、命題の断片(Bachは、命題の基本部分(a propositional radical)と呼ぶ)にすぎず、文に細かい点を追加することによって、命題の基本部分を埋めて、完全な命題を表現できるようにし、それが話し手の伝達しようとすることになる。ここでは、陰意に関することであって、その前段階である「言われること」で扱われる指示物の付与と曖昧性の除去は前提にされている。

例12: You are not going to die. (「あなたは、死ぬことはない。」)

例13: I haven't eaten. (「私は、食べなかった。」)

例14: Steel isn't strong enough. (「鉄は、十分強くない。」)

例15: Willie almost robbed a bank.

(「Willieは、ほとんど銀行強盗をした。」)

例12と例13が拡大の例で、例14と例15が完全の例である。例12の場合、例えば、指を切った子供に母親が例12を発話する時、永遠に生きることを意味しているのではなく、この傷で死ぬことはないことを意味しているのであり、従って字義どおりの意味で使用しているのではないことになる。例12の文の字義どおりの意味は、「発話者の相手が不死である」という明確な命題、つまり最小限の命題を確定してしまうが、そこに適当な語句を挿入して拡大し、“You are not going to die from this wound.”(「あなたは、この傷で死ぬことはない。」)(下線部が挿入語句の部分である)とすることで、話し手の伝達しようとしてい

ることが明確にされることになる。例13も同様で、文の字義どおりの意味は、「発話者は、発話時以前に食べたことはなかった」という最小限の命題を確定してしまうが、それを拡大して、“I haven't eaten dinner today.”(「私は、今日夕食を食べなかった。)」とすることで、話し手の伝達しようとしていることが明確にされることになる。それに対して、例14の場合、鉄が十分強くないのは、何に対してであるかかはっきりしない限り、完全な命題を表現することはできず、文の意味が確定するのは、命題の断片である基本部分だけで、それを完全なものにしなければならず、その意味で、例14の文は、意味的に十分確定されていないことになり、細かい点が追加されなければならないことになる。例15の場合、問題は“almost”で、銀行強盗にほぼ成功したのか、銀行強盗を止めて、別の何かを強奪したのか、あるいは銀行強盗をしようとする気持ちをほとんど抑えられなかったのか、そのいずれかがはっきりしない限り、完全な命題を表現することはできず、従って例15の文は、意味的に十分確定されておらず、その文の意味によって確定される命題の基本部分を埋めることで完全なものにする為に、細かい点が追加されなければならないことになる。

そして、前掲の例6と例10に関しても、拡大の例として同様の処理がなされる。“I have had breakfast today.”(「私は、今日朝食を食べた。)、そして“Everybody in our group went to Paris.”(「私達のグループの全員が、パリに行った。)」という具合に、適当な語句を挿入することで、最小限の命題を拡大するのである。

例16: Everybody is coming. (「全員がやってくる。)」

更に、例16のように、例えば、“Everybody in my class is coming to the party.”(「私のクラスの全員が、パーティーにやってくる。)」となれば、単一の発話で拡大(in my class)と完全(to the party)が同時に起きることになる(拡大だけでなく、完全でも、適当な語句の挿入によって話し手の伝達内容が明確にされることもあり、逆に、拡大でも、単なる語句の挿入では無理なケースもあるとBachは言う)。

特に、拡大において明らかなように、強化に見られるような伴立(entailment)関係(例えば、より豊かな命題が完全な命題を必然的に伴うという関係)が姿を消し、単に文に適当な語句を挿入することで、最小限の命題を拡大(強化ではなく)するのであり、しかもその拡大を

必要とする根拠が、文全体の非字義性にあるとしている点で（文を字義どおりの意味で受け取ると、話し手の伝達内容と食い違いが生まれるので、伝達内容と一致させる為に拡大が必要となる）、Carston (Sperber and Wilson を含む) と Récanati と大きく異なる。例えば、「強化」を「拡大」に変更することで、Récanati が指摘するように⁽²⁸⁾、例 8、例 10 のような、強化によっては処理できない例が拡大によって処理できることになる。

Bach にとっては、語用論的に処理されるべき要素が、三領域に区分されて扱われるが、その区分の基準に関しては、必ずしも明確になっているとは言えない。Carston の機能的独立の基準と Récanati の入手可能性の原則に反対して（伴立関係という条件を排除し、単に直感に頼ることへの不満を示す）、どのような基準を代案として考えているのであろうか。ただ言えることは⁽²⁹⁾、「言われること」が文の言語的意味に密接に関係すべきものであるとし、その中で特に、「言われること」が文を構成する各要素の意味とそれらの統語的構造によって決められるべきものであるが、指示物の付与と曖昧性の除去といった調整が「言われること」にとって必要で、それ以上の調整は必要ないものとし、そのような「言われること」を超えるが、あくまでもそこから作り出されるのが陰意（「言われること」を肉付けしたり（拡大）、埋めたりすること（完全））であるとし、そのような「言われること」の外にあって、外から追加されるのが含意であるとしていることであり、また、話し手があることを言い、そのことを意味するだけでなく、その上それとは別のことも意味するのが含意であるとし、話し手があることを言い、それとは別のことを意味するのが非字義的発話（文の非字義性が含まれるが、それ以外にも、隠喩、反語などが含まれる。なお、意味の確定不十分性の場合、話し手があることを言い、そのことを意味することになる）であるとしていることである。更に、指示物の付与・曖昧性の除去と拡大・完全を二つの異なる領域で扱うことに関しては、特に指示物の付与と完全を取り上げて、指示物を付与すること、そして命題の基本部分にできる意味的隙間を埋めることは、類似しているように見えるが（Récanati によれば、指示物の付与が飽和の特殊なケースになる）、文の構成要素として指標詞（代名詞、時と場所の副詞など）は文の中に存在し、あくまでも言語的段階で文の中に入り込むのであって、指標詞といった文の

構成要素の解釈を明確にさせるのが指示物の付与であるのに対して、意味的隙間は言語的段階ではなく、概念的段階で文の中に入り込むのであって、完全な命題を表現できるようにするのが（概念的な）意味的隙間を埋めることであるという相違があるとしている⁽⁵⁰⁾。そのことは、指示物の付与と曖昧性の除去が言語的段階での問題である為、「言われること」に属するが、完全と拡大が概念的段階での問題である為、陰意に属することを示している。しかし、完全の例として、Bachは“*She will be here soon.*”（「彼女は、すぐここに来るでしょう。」）といった指標詞の例を挙げているが⁽⁵¹⁾、指示物の付与とどのように区別するのであろうか。いずれにせよ、「含意されること」とは異なり、「言われること」の延長線上に陰意があると言え、その意味で、語用論的に処理されるべき要素を二つに大別できよう。

6. Carston、Récanati、そしてBachの主張と問題点

Grice批判を出発点として、それぞれが批判的に自らの主張を展開していくのである。その出発点となるのが、「言う」そして「言われること」の意味のGrice的捉え方である。そこで、例6の“*I have had breakfast.*”（「私は、朝食を食べた。」）を使用して、それぞれの相違を見ることにする。

Griceの場合、「言われること」は、発話される言葉の言語的意味に密接に関係するもの、具体的には、言語的意味+指示物の付与（発話時の確定を含む）+曖昧性の除去であり、それ以外の語用論的に確定される全要素は、「含意されること」であるとされる為、“I”の指示物が付与され、発話時が確定されれば、例6の発話によって「言われること」は、発話時以前に、話し手が少なくとも一度は朝食を食べたということになり、それ以外のことは、実際には言葉で言い表されていないので、コンテキストに基づいて語用論的に確定されるもので、従って話し手が今日（発話のその日に）朝食を食べたということは、「含意されること」になってしまう。しかし、そのような含意分析の方法が有効でないのは、例えば、お腹が空いていると思って、食事を誘ってくれる人に対して、例6を発話する時、話し手が伝達しようとしていることは、お腹は空いていないので、いりませんということで、そのような純粋な含意と同様に扱えないからである。

Carstonによれば、発話される言葉の言語的意味を發展させ、その延長線上にある限り、表意 (= 発話の明示的内容 = 「言われること」) であり、指示物の付与と曖昧性の除去だけでなく、拡充も表意に含まれることになり、しかも機能的独立の基準によって表意と含意が区別されるので、Griceの含意と考えられるもの(話し手が今日朝食を食べた)は、必然的に表意(例6によって字義どおりに表現される命題: 指示物の付与と発話時の確定を前提にして、発話時以前に、話し手が少なくとも一度は朝食を食べた)を伴うので、純粋な含意ではなく、表意の一部(例6の言語的意味を發展させ、その延長線上にあるもの)となる。それは、もし話し手が今日朝食を食べたのであれば、発話時以前に、話し手が少なくとも一度は朝食を食べたことになるからである。しかし、例えば、例8、例9、例10などのように、伴立関係が成立しないにもかかわらず、純粋な含意ではなく、表意の一部と言えるケースがあり、従って機能的独立の基準の有効性に問題があることになる。

Récánatiによれば、まず最初に、Sperber and Wilsonの理論的枠組みで考えれば、指示物が付与され、発話時が確定されれば、例6の発話によって完全な命題が表現されることになり、その最小限の命題(発話時以前に、話し手が少なくとも一度は朝食を食べた)を拡充し、それによって得られるもの(話し手が今日朝食を食べた)が、話し手の伝達しようとしていることになり、しかも後者が前者を必然的に伴うので、その拡充は強化ということになる。しかし、完全な命題を表現していないと考えることもでき、その場合は、例6の発話が完全な命題を表現する為に、文の意味にできた隙間を埋めなければならず、その隙間を埋めるという拡充(飽和)によって得られるものが、話し手の伝達しようとしていることになる。次に、Grice的「言われること」に拡充までも含めて、拡大解釈された「言われること」に入手可能性の原則を適用して、生涯の中で、話し手が少なくとも一度は朝食を食べたということが「言われること」で、話し手が今日朝食を食べたということが含意であるとするGriceの主張は、話し手の直感に反するものであるとし、後者が「言われること」であることは、話し手の直感によって明らかであるとしている。しかし、たとえ直感が重要であるにしても、話し手側の直感が強調されすぎている印象が強いが、聞き手側の直感も強調されなければならないであろうし、それ以上に、たとえ現実の話のやりとりで、

私達の直感が重要な役割を演じるとしても、入手可能性の原則よりも客観的な基準が必要ないのであろうか。

Bachによれば、例6の字義どおりの意味によって最小限の命題（発話時以前に、話し手が少なくとも一度は朝食を食べた）が確定されるが、話し手の伝達しようとしていることは、それとは異なり、最小限の命題を拡大することによって、具体的には、“today”（「今日」）という語を例6に挿入することによって得られるのが、話し手の伝達しようとしていること（話し手が今日朝食を食べた）になる。そして、例6が完全な命題を表現しているという前提で、もし例6が字義どおりに使用されていると受け取るならば、その字義どおりの意味によって確定される命題が、話し手の伝達しようとしていることになってしまうので、話し手はその文を字義どおりに使用していないことになり（文の構成要素は、全て字義どおりに使用されているが）、そこに文の非字義性があることになる（なお、完全の場合は、文を字義どおりに使用しているが、ただ文によって表現される命題が、完全ではなく、従って全部ではなく、一部にすぎない）。次に、発話時以前に、話し手が少なくとも一度は朝食を食べたこと、そして話し手が今日朝食を食べたことに関するGriceの主張（前者が「言われること」で、後者が含意であるとする主張）については、例6によって話し手が伝達しようとしていること（後者）は、「言われること」（前者）を超えてはいるが、純粋な含意のように、「言われること」の外にあって、外から追加される訳ではなく、むしろ「言われること」から導き出されるものであり（「言われること」に語句を挿入することによって肉付けし、拡大する）、また純粋な含意のように、話し手が自分の言うことを意味すると同時に、別のことも意味する（話し手は、例6を字義どおりに発話して、前者を意味すると同時に、後者を意味する）訳ではなく、むしろあることを言うが、別のことを意味する（話し手は、例6を発話するが、後者を意味する）ような非字義的発話であり、従って後者は、含意ではなく、勿論「言われること」（前者）でもなく、それらの中間に位置する陰意であるということになる。しかし、文の非字義性（隠喩などのような非字義性とは明確に区別されるもの）が拡大において存在するのか、陰意という新たな領域を作り出す必要性があるのか、問題がある。

以上の相違点は、比較しやすいように、すでに述べてきたことを、例

6との関係で、ごく簡単に繰り返したものである。そして、全ての問題点をここで扱うことはできないので、その内の一部を挙げておいた。その問題点について、簡単に見ることにする。

最初は、含意に関してである。発話状況の違いにより、話し手が例6によって伝達しようと意図していることは、話し手が今日朝食を食べたということであったり、お腹は空いていないので、いりませんということであったりする訳であるが、「言われること」のGrice的定義に従えば、「言われること」に入れることができず、両者とも含意ということになってしまう。しかし、後者については、「言われること」の外にあって、外から追加されるものであることは明らかで、純粋な含意であると言えるが、前者については、Grice的「言われること」に限定しても、拡大解釈された「言われること」にしても、表意にしても、後者と同様のことは言えず、純粋な含意とは異なることになる(どのような名称を付けても、含意とする限りでは、変わらない)。その点では、上記のGrice批判は、妥当性があると言えよう。むしろ、言語的意味の延長線上に位置するもの(言語的意味を何らかの形で膨らますこと)として捉える方が妥当であろう。その延長線上には、指示物の付与、曖昧性の除去、そして拡充が位置するが、その延長線上をいくら辿っていても、含意には辿りつくことはないからである。そこで、問題は、言語的意味の延長線上に位置するものをどのように扱うかであるが、扱い方の違いにより、例えば、上記のような相違が生まれてくるのである。

語用論的に確定される要素の中で、含意とそれ以外をどのような基準で区別すべきなのか。拡充の全てのケース(特に、強化、拡大)で、伴立関係がいつも必ず成立するとは限らないのであれば、Carstonの機能的独立の基準の有効性は、失われることになるであろうし、その点では、伴立関係の成立という条件を排除するRécanati(入手可能性の原則)とBachの主張は、理解できるものである。しかし、含意とそれ以外が内容的に重複しないことを明確にする目的で、伴立関係の成立・不成立を条件にした訳で、その条件を排除するにしても、その目的が正当であることには変わらないのである。では、入手可能性の原則は、どうであろうか。現実の話のやりとりでは、発話解釈を通して、話し手の伝達しようとすることを聞き手は直感によって理解し、聞き手が直感によって理解できるように話し手は発話するのである(聞き手が理解できな

かったり、理解するのにかなりの時間と労力が必要であったり、誤解するのであれば、話し手側にも責任があり、そのような場合には、聞き手が聞き返してくるであろうが)。しかし、話し手の伝達しようとしていることを聞き手が直感によって理解するとしても、伝達内容の理解が中心で、含意なのか、それとも拡充なのかという判断はしていないであろうし、発話する側の話し手にとっても、そのことは意識していないであろう。話し手の伝達しようとしていることが、言語的意味（指示物の付与と曖昧性の除去を含む）だけなのか、拡充なのか、含意なのか、それを決めるのは（つまり、いずれであるかを決める為に研究する必要があるのは）、研究者であって、話のやりとりの当事者には、それは余り問題にはならないであろうし、むしろ話を進める為に必要な伝達内容の方が重要となる。その点だけから言うと、話のやりとりの当事者にとっては、実際に発話される言葉の言語的意味（指示物の付与と曖昧性の除去を含む）、そして実際に言葉によって言い表されない意味といった区別ぐらいしかないであろうし、従ってGriceの「言われること」と「含意されること」の区別の方が、むしろ現実には即しているとも言えるであろうし、理論家の直感ではなく、話し手の直感（ごく普通の人の直感）に基づくべきであるとするRécanatiの入手可能性の原則⁽³²⁾は、現実の話のやりとりにおける理解過程を反映しているが、含意とそれ以外を区別する為の基準としては、問題があるとも言えよう。そのことは別にしても、入手可能性の原則によって拡充のケースが説明される時、飽和と強化が必ずしも明確に区別されているようには見えないのは、そのことが原因しているのであろう。ともかく、Récanatiによれば、文の意味は、「言われること」、または「伝達されること」よりも抽象的で、理論的なものであるということになるが、それは、後者がごく普通の人の直感に基づいて理解されるものだからであり、前者が直感によっては理解できないからである。そして、文の意味分析の為の基準を供給するものであるとしている最小限要求主義者の原則のところ、飽和と強化が区別されて、論じられているが、強化によって説明されてきたケースの多くが、飽和によっても説明できるという可能性を示している。その可能性を更に拡大し、強化の全てのケースが、飽和によって説明可能であるとし、最小限要求主義者の原則を擁護することは、十分検討価値のあるものと言えよう。その評価はともかくとして、ある意味で、Bachは、

Récanatiの言う最小限要求主義者の原則に同意する面があり、それは、文に語句を挿入することによって、最小限の命題を肉付けし、拡大し、また文に細かい点を追加することによって、命題の基本部分を埋めて、完全なものにする場合、文の意味分析が重要になるからである。

強化と含意を区別する基準として、伴立関係の成立・不成立という条件が挙げられていたが、その条件を排除するBachは、拡大と含意を区別する基準として、文の非字義性の有無という条件を挙げている。つまり、前述したように、話し手があることを言い、そのことを意味するだけでなく、その上それとは別のことを意味するのが含意（または、間接的言語行為）であり、話し手があることを言い、それとは別のことを意味するのが非字義的発話であるとしている。具体的には、次のようになる。

例17: It's getting hot in here. (「ここは、熱くなってきた。」)

例18: Sam is a pig. (「Samは、豚である。」)

J.R.Searleの例を使用すれば、例17を発話する話し手が、字義どおりの意味で、「ここは、熱くなってきた。」を意味するだけでなく、その上「熱くなってきたので、窓を開けてください。」を意味するのであれば、間接的言語行為となり（Bachは、含意と間接的言語行為に対して、同様の扱いをしているので、ここでは一応Searleの例を使用する）、例18を発話する話し手が、字義どおりの意味で使用するのはなく（Samは、人間であって、豚ではないので）、「Samは、不潔で、貪欲で、だらしなく、...である。」を意味するのであれば、隠喩的発話となる。更に、例17の場合、「ここは、熱くなってきた。」を意味するのではなく、「ここは、大変寒いです。」を意味するのであれば、反語的発話となり、「ここは、熱くなってきた。」を意味するのではなく、「議論が進むにつれて、ののしりあいますます激しくなっている。」を意味するのであれば、隠喩的発話となる⁽³³⁾。Bachは、Récanatiの批判（特に、Bachの文の非字義性を隠喩として受け取り、Bach批判をしている点⁽³⁴⁾）に対して、非字義性の純粋なケースが、隠喩のようなものに限定され、文の非字義性を排除しているとして反批判をする⁽³⁵⁾。Bachの言う非字義性には、隠喩、反語、その他のものの他に、文の非字義性が含まれ、しかも文の非字義性（文の構成要素は、字義どおりの意味で使用される）が、隠喩などの文の構成要素の非字義性とは区別されるべきも

のであるとしている。そこで、拡大（文の非字義性）の例としてBachが挙げる例6、例10、例12、例13、そしてSearleの例18を比較すれば、例18では、文の構成要素である“pig”が、字義どおりの意味では使用されていないのに対して、それ以外では、文の構成要素の全てが、字義どおりの意味で使用されているのに、文全体が字義どおりの意味では使用されていないこと（勿論、Bachの主張が正しいとするならば）が理解できる。しかし、問題は、例17の反語的発話のように、文の構成要素全てが、字義どおりの意味で使用されているのに、文全体が字義どおりの意味では使用されていない反語が、文の非字義性と同一ものになってしまうことである。勿論、Bachの言う文の非字義性と反語とは、本来異なるものであるが、その点に関しては、特に言及されていないのである。次に問題になるのが、文の非字義性と隠喩の区別の仕方である。というのは、隠喩には、例18のような文の構成要素の非字義性と例17のような文の非字義性（例17の隠喩的発話の場合）があるからである。例えば、よく引用されるSearleの例“I have climbed to the top of the greasy pole”について言えば、字義どおりの意味で発話すれば、「私は、つるつる滑りやすい柱のてっぺんまで登った。」を意味することになるが、つるつる滑りやすい柱もなく、登ったという行為も存在しない状況で、Disraeliが首相になった時に発話すれば、隠喩的発話になる（例えば、「私が首相になるには、実に大変な苦勞をしてきた。）。S.R.Levinは、そのような隠喩を多義的隠喩(equivocal metaphor)と呼ぶ⁹⁶⁾。もしそうであれば、文の非字義性と隠喩（特に、その一部である多義的隠喩）は、共に、話し手があることを言い、それとは別のことを意味するものであり（非字義性）、更に文の構成要素全てが、字義どおりの意味で使用されているのに、文全体が字義どおりの意味では使用されていないものなので、同一のものになってしまい、少なくともその点に関して言えば、Récanatiへの反批判は、的を得ていないことになるであろう。非字義性の中での拡大と隠喩の区別を強調するBachは、文の非字義性と文の構成要素の非字義性という基準による区別を前面に出しているが、そこに問題があると言える。というのは、拡大に見られる文の非字義性と隠喩・反語は、本来異なるもので、前者では、文に適当な語句を挿入することで、最小限の命題を肉付けし、拡大することになるが、後者では、それができないことになり、そのような点が必ずしも

十分には示されず、混乱と誤解を生み出すからである。

では、非字義性の中での拡大と隠喩・反語の区別の基準に関して、単なる混乱と誤解で済むのであろうか。少なくとも、非字義性（文全体か、それとも文の構成要素か）を基準にしては、区別できない以上、しかし上記の別の基準では、区別できる以上、拡大を非字義性として捉えることが、果たして必要なのであろうか。例えば、例6 “I have had breakfast” の場合、文の言語的意味の延長線上に位置するものとして拡大を捉えるからこそ、“today” という語を挿入するだけで、最小限の命題を肉付けし、拡大することができるのであって、隠喩と反語の場合は、文の言語的意味の延長線上をいくら辿っていても、話し手の伝達しようとしている隠喩的意味と反語的意味に辿り着くことはないのである。文の言語的意味の延長線上に位置しないものとしては、含意（または、間接的言語行為）、隠喩、反語などがあり、その延長線上に位置するものとしては、指示物の付与、曖昧性の除去、そして拡充（拡大と完全）がある訳で、明確な区分けができるのであって、その線引をあえて変更し、拡大だけを非字義性として捉え、隠喩、反語などと同じ範疇に入れることが必要であると言えるであろうか。

文の言語的意味の延長線上に位置するものの内、Bachによれば、指示物の付与・曖昧性の除去と拡充に区別され、限定された「言われること」と陰意という二領域でそれぞれが扱われることになり、Carstonによれば、表意という一領域で全てが扱われることになり、Récanatiによれば、同様に、拡大された「言われること」という一領域で全てが扱われることになる。少なくとも、言語的意味の延長線上に位置するかどうかで大別できることについては、一致していると言えようが、更に区別する必要があるかどうかで、意見が食い違うことになる。しかし、その食い違いは、すでに述べたように、CarstonとBachを比較すれば、拡充を明示的に伝達されるものとして捉える為、表意の一部とするのに対して、明示的に、言葉で言い表されず、暗に示されるものとして捉える為、陰意とするという具合に、「明示的」に関する解釈の相違によるところがあり、RécanatiとBachを比較すれば、拡充を指示物の付与・曖昧性の除去の延長線上に位置するものとし、Grice的「言われること」の言語的意味+指示物の付与+曖昧性の除去に拡充を加えて、拡大された「言われること」にするのに対して、Grice的「言われること」の内、

言語的意味が中心で、あくまでもその調整として指示物の付与・曖昧性の除去が加わるだけで、拡充を単なる調整役から切り離して、限定された「言われること」にするという具合に、「言われること」に関する解釈の相違によるところがある。単なる用語上の問題として片付ける訳にはいかないが、「言う」に関する Grice 的定義と Austin 的定義を守る一方で、含意から明確に区別されるものを「陰意」として処理していこうとする Bach の趣旨は、理解できるものであるが、陰意という新たな領域を作り出す必要があるかどうかは、まだ問題を残していると言える。

7. 最後に

日常的な会話において、私達の伝達しようとするものが、発話される言葉の言語的意味（指示物の付与と曖昧性の除去を含む）の理解だけでいつも必ず明らかになるのであれば、問題は複雑にならないであろうが、実際には言葉によって言い表されない意味の理解が鍵を握っているケースが実に多いのである。そのような言葉によって表面に表れない意味は、語用論的に処理されるべきものであるが、決して一様に処理できるものとは言えないであろう。意味論的には処理できず、語用論的にしか処理できない意味を全て含意として捉えた Grice は、言葉によって表面に表れない意味の存在とその意義を明確にした点では、誰もが一致して評価するところであるが、語用論的に確定される諸要素をどのように区別し、どのように定義するかに関しては、明確にされないままに残されたことで、様々に批判されることになるのである。本稿で検討した三つの Grice 批判は、Grice によって明確にされないままに残された部分を明確にする目的でなされたものであるが、あくまでもその一部にすぎず、更に明確にしなければならないものが多くあるのである。

注

- (1) R.Carston, "Implicature, Explicature, and Truth-Theoretic Semantics" in R.M.Kempson (ed.), *Mental Representation: The Interface Between Language and Reality* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988). 本稿では、S.Davis (ed.), *Pragmatics: A Reader* (Oxford: Oxford University Press, 1991), pp.33-51 を使用する。
- (2) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said" in *Mind and Language* 4 (Oxford: Basil Blackwell, 1989). 本稿では、S.Davis (ed.), *Pragmatics: A Reader*, pp.97-120 を使用する。

- (3) K.Bach, "Semantic Slack:What is said and more" in S.L.Tsohatzidis (ed.), *Foundations of Speech Act Theory* (London:Routledge, 1994), pp.267-291.
- (4) R.Carston, "Implicature,Explicature,and Truth-Theoretic Semantics", p.37.
- (5) K.Back, "Semantic Slack", pp.269-270.
- (6) F.Recanati, "The Pragmatics of What Is Said", p.98.
- (7) H.P.Grice, "Utterer's Meaning and Intentions" in *Philosophical Review* 78 (1969); reprinted in H.P.Grice, *Studies in the Way of Words* (Massachusetts:Harvard University Press,1989), p.87.
- (8) H.P.Grice, "Logic and Conversation" in P.Cole and J.L.Morgan (eds.), *Syntax and Semantics, vol.3, Speech Act* (New York:Academic Press, 1975); reprinted in H.P.Grice, *Studies in the Way of Words*, p.25.
- (9) R.Carston, "Implicature,Explicature,and Truth-Theoretic Semantics", p.33.
- (10) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", p.98.
- (11) K.Bach, "Semantic Slack", p.271.
- (12) R.Carston, "Implicature, Explicature, and Truth-Theoretic Semantics", pp.33-34.
- (13) R.Carston, "Implicature,Explicature,and Truth-Theoretic Semantics", pp.39-41.
- (14) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", p.102.
- (15) K.Bach, "Semantic Slack", pp.268-269.
- (16) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", p.277.
- (17) D.Sperber and D.Wilson,*Relevance:Communication and Cognition* (Oxford:Basil Blackwell, 1986), p.182. (日本語訳は、『関連性理論－伝達と認知－』(研究社, 1993, 221頁を使用) R.Carston, "Implicature, Explicature, and Truth-Theoretic Semantics", p.41.
- (18) R.Carston, "Implicature, Explicature,and Truth-Theoretic Semantics", p.33, p.45, p.49.
- (19) K.Bach, "Semantic Slack",p.270.
- (20) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", p.102.
- (21) R.Carston, "Implicature,Explicature,and Truth-Theoretic Semantics", p.40.
- (22) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", pp.98-100.
- (23) R.Carston, "Implicature, Explicature,and Truth-Theoretic Semantics", pp.34-35.
- (24) R.Carston, "Implicature, Explicature,and Truth-Theoretic Semantics", pp.39-41, p.46.
- (25) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", pp.101-105, p.99.
- (26) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", pp.105-108.
- (27) K.Bach, "Semantic Slack", pp.267-269, pp.272-273, pp.278-283.
- (28) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", pp.118-119.

- (29) K.Bach, "Semantic Slack", pp.272-274, pp.277-278.
- (30) K.Bach, "Semantic Slack", p.282.
- (31) K.Back, "Semantic Slack", p.284.
- (32) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", pp.106-107.
- (33) J.R.Searle, "Metaphor" in A.Ortony(ed.), *Metaphor and Thought* (Cambridge:Cambridge University Press, 1979).
- (34) F.Récanati, "The Pragmatics of What Is Said", p.108.
- (35) K.Bach, "Semantic Slack", p.280.
- (36) S.R.Levin, "Language, Concepts, and Worlds:Three Domains of Metaphor" in A.Ortony(ed.), *Metaphor and Thought*, pp.116-119.